

特定非営利活動法人 碧いびわ湖

年間活動レポート

2024 年版



子どもと湖が笑ってる未来へ

碧いびわ湖

共に生きる暮らしを 共にはぐくむ

「子どもと湖が笑ってる未来へ」を掲げて碧いびわ湖を設立し、旧滋賀県環境生活協同組合の事業を継承してから 15 年。様々なチャレンジを経たいま、自分たちが大切にしたいことが明確になってきました。

それは、すべての子どもがのびやかに育っていける暮らしをはぐくむこと。やがてその子たちが大人となり、次の世代が育つ社会をつくっていけるように。

しかし今、自然環境の劣化、紛争や人道危機、地域の経済とコミュニティの貧困化、そして不登校の増加など、さまざまな問題が山積しています。

その背景には、あらゆるものを市場化する「新自由主義」の広がりによって起きている、人もモノも「どれだけ役に立つか」で評価し選別する風潮の蔓延があると思います。

碧いびわ湖の原点の「せっけん運動」は、こうした風潮にあらがい、生活者が主体となって一つ一つの生命の尊厳と、生命の基盤である自然環境を守る「地域自治」の実践でした。

私たちがつくり続けるのは、共に生きる暮らしです。構築されたシステムに依存し、外部の人やモノを排除して”生き延びる”日々ではなく、わたしとあなた、あらゆる生命に固有の尊厳を守りあい、誰も排除することなく、共に、自分の命を輝かせて”生きる”暮らしです。

また一年、みなさまと、共に生きる暮らしをはぐくみたいと思います。食べること、住まうこと、語り合うこと、子どもたちの育ちを喜び合うことを共にしながら。どうぞよろしくおねがいします。

2024 年 5 月

代表理事 村上 悟

一人ひとりの参加と協力で

碧いびわ湖は、一人ひとりの参加と協力で活動する市民事業体です。自然環境を守りはぐくみ、子どもたちが育ちゆく循環型の暮らしと地域社会をつくる活動を行っています。

地域づくり	共同購入・リサイクル	住まいづくり
ホタルが自生する川づくりや環境学習事業（守山市）、休眠預金活用事業など、一人ひとりの足元から、協力しあって暮らしの基盤を整えていく「地域づくり事業」を行っています。 	びわ湖の流域産の有機農産物や間伐材入り紙製品、リサイクルせっけんやティッシュなどをみんなで購入する「共同購入事業」を行っています。また原料となる廃食用油や牛乳パックをみんなで集める「リサイクル事業」も行っています。 	雨水、太陽熱、森の木々などの身近な自然を生かす住まいを、人々の協力で作る「住まいづくり事業」を行っています。子どもたち自身が参加する小屋づくりや、協同住宅づくりの実現に向けた取り組みなどもしています。 
市民自治・政策提言		
会員交流会の開催や、市民メディア“あまいろだより”の発行など、一人ひとりが想いと力を持ち寄り実践する「市民自治」を行っています。琵琶湖流域の環境保全や、子どもの育ちや学びなどについて、学び合い、議論し、行政や企業などにもはたらきかける「調査研究・政策提言」も行っています。		

はじまりは琵琶湖のせっけん運動でした

1977年5月、琵琶湖の湖面が赤錆色に染まり、異臭が漂いました。プランクトンが異常繁殖する「赤潮」という現象で、洗濯に使われていた有リン合成洗剤がその原因でした。生協、婦人会、労働組合などが協力してせっけんの使用が進められ、1980年には県内で有リン合成洗剤の販売を禁じる富栄養化防止条例（びわ湖条例）が制定されました。



そのせっけん運動の一翼を担った「湖南消費生活協同組合」の中から、1989年に「滋賀県環境生活協同組合」が設立され、環境分野に特化した市民事業と地域づくりを行いました。2009年、この生協の事業を継承して生まれたのが碧いびわ湖です。子育て世代を中心に、約50年にわたる運動と事業を継続しています。

あらゆる子どもの育ちをはぐくむ

休眠預金活用事業「あらゆる子どもの育ちを保障する地域総動」が始動。
不登校の子どもと保護者の応援に取り組む6団体の活動に伴走し、あらゆる
子に居場所とチャレンジの場がある地域づくりに取り組んでいます。



施設改修をされた大津オルタナティブスクール「トライアノンフ」での子どもたちの作品展示・発表の様子（大津市）



彦根の旧市街地にある「フリースクールてだのふあ」の
てだのふあ祭りは地域の人々にぎわいました（彦根市）



“遊びによる学び”の実践と見える化に取り組む「スキ
ニシー学校」に県副知事が視察に来られました（栗東市）

●相互訪問学習会を開催

実行団体同士の相互訪問学習会を2回開催しました。訪問先の見学で気づきや発見を得られたり、活動や運営についての具体的な情報交換が行われたりと、とても有意義な時間となりました。

●「学校行かないかもラジオ」制作開始

“不登校の周囲半径 2m”の人々に不登校への理解を深めていただくことを目指し、ネットでの音声配信「学校行かないかもラジオ」の制作を開始しました。

●有識者による評価チームを組成

事業で得られた成果と知見を可視化して社会に還元することを目指し、有識者による評価チームを組成しました。研究会を複数開催し、支援のあり方や、活動成果の把握方法などについて議論を深めています。



実行団体の相互訪問学習会の様子



「学校行かないかもラジオ」の収録風景

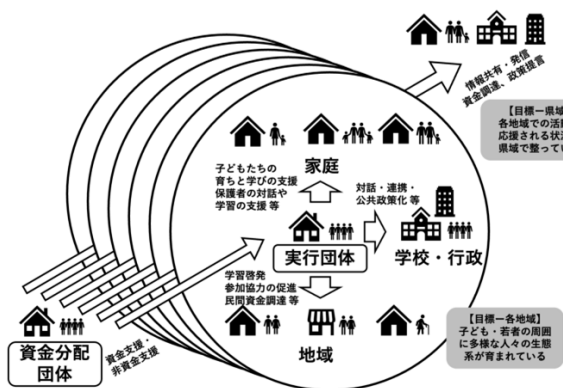
●休眠預金活用事業とは？

10年以上入出金されていない預金等を活用して民間公益活動を促進する事業です。法律に基づいて実施されています。

「実行団体」の活動を「資金分配団体」が資金面・非資金面の両面で伴走支援して目標の実現を目指します。

●本事業の概要

碧いびわ湖と公益財団東近江三方よし基金が共同で「資金分配団体」となり3年間、県内6つの「実行団体」への資金支援（総額1億2千万円）と非資金支援を行います。「あらゆる子ども・若者が、安心し、自信をもち、自由に育ち学ぶことができる社会」を目指し、子どもと保護者を取りまく人々の理解の深まりと応援の豊穠化に取り組みます。



<6つの実行団体>

- ・NPO法人フリースクールてだのふあ（彦根市）
- ・一般社団法人日野里山フリースクール（日野町）
- ・スキニシー学校（栗東市）
- ・一般社団法人異才ネットワーク（大津市）
- ・一般社団法人ぐるり（東近江市）
- ・NPO法人竜王子育てネットワーク（竜王町）

自然のなかで力が湧きでる暮らし

身近な自然の中で親子の仲間とともに

遊び・学び・暮らす

地球環境危機の時代に環境再生型の野菜づくりを始めました



守山駅から徒歩 10 分のところにある「あまが池親水緑地」にて環境学習クラブ「ルシオールキッズクラブ」



もりやまエコパークにて「おいしい庭」



西の湖エコロジャーハイキングを3回実施しました

●守山にてほたるが自生する川づくり

株式会社みらいもりやま 21 とともに、守山のまちなかにて親子でほたるが飛ぶ環境学習クラブ「ルシオールキッズクラブ」を運営しました。

●守山市環境学習事業「おいしい庭」

もりやまエコパークのお庭にて親子の遊び場「おいしい庭」を実施し、3年間で延べ1035名が参加されました。

●環境再生型の野菜づくりを行いました

守山市洲本町の農園にて環境再生型の野菜づくりを行いました。JA レーク滋賀食育直売部のご協力と、平和堂財団夏原グラントのご助成をいただきました。農業指導は松平尚也さんにいただきました。また、一般社団法人シネコカルチャーおよび藪木一輝さん（協生農法士）を招いた学習会を行いました。

●野洲川にて「なかす野洲川たんけん隊」

野洲川にて親子活動12回が行われ延べ306名が参加されました。

●西の湖エコロジーフットパス・マップ作成

近江八幡市企画課受託事業「西の湖エコロジーフットパス・マップ」を河合嗣生さんとともに作成しました。西の湖の周りを歩く西の湖エコロジーハイキングを3回実施しました。

<他にもこんな活動をおこないました>

- 中洲こども園、小津こども園、立入が丘幼稚園の川遊びをサポートしました
- 県立守山北高校コミュニティスクール運営協議会および普通科改革に向けた運営指導委員会に参加
- 地域プロデューサー養成「おうみ未来塾」の運営委員会に参加



初めての水生生物調査にチャレンジ



混生密生の野菜づくり



野洲川にて親子参加の川遊び



西の湖（安土）ヨシ原 ツバメのねぐら入り

びわ湖と共にある暮らしの実践

時代は変わっても、水や食料、信頼できる仲間など、わたしたちが生きる上で必要なものの根本は同じです。人と自然、人と人とのつながりを守りはぐくむ暮らしを実践し続けています。



子どもと大人がいっしょになって、竹ドームを畑につくりました（滋賀シュタイナーこども園そらさんにて）



太鼓と楽器で、子どもも大人も音と踊りを一緒に楽しみました（写真は日野里山フリースクールとの活動）



牛乳パックのリサイクル体験として、牛乳パックでの紙すき体験を行いました（安土小学校）

●竹を使ったドームづくり

草津の「滋賀シュタイナーこども園そら」さんからの依頼で、雨水タンク付きの竹ドームを親子でつくり、畑に設置しました。設計は理事の喜多亮夫さん。竹は子どもたちが以前に組み立てたテントの再利用です。日よけと貯水が同時にできるようになりました。

●太鼓と踊りで楽しむ会

平和堂財団のいきいきすくすく淡海っ子活動助成を受け、西川修平さん（チャクラン堂）をナビゲーターにアフリカ太鼓で音と踊りを楽しむ会を近江八幡、安土、日野で開催しました。

音に体を委ねて楽器を鳴らしたり体を動かしたりして、子どもも大人も一緒に楽しみました。

●牛乳パックリサイクル体験

昨年に続き、安土小学校3年生の地域学習の一環で、牛乳パックを使った紙すき体験をしました。平和堂のE-WA 芯なしトイレットペーパーの売上からの寄付を原資とした活動です。はがきづくりの実体験を通じ、リサイクルの原理と意味の理解が深まったことが子どもたちの感想から読み取れました。

●あまいろだよりの発行

今年度もあまいろ探偵団は精力的に取材・編集を行いました。Vol.53 311 子ども甲状腺がん裁判、Vol.54 お産を支える「継続ケア」、Vol.55 120 年続く私設図書館 江北図書館 を発行しました。

* * *

その他、多くの方や団体のご協力で、様々な活動を行うことができました。ありがとうございました。



あまいろだより Vol.55



安土のフリースクール「since」のお仕事体験（キッチンカー）の活動に協力しました



高時川では、2022 年の豪雨以来、長期濁水や治水上の課題が続いています。流域治水の学習会開催などに参画しました。



みっけ! 水俣のびろ湖～映画「水俣曼荼羅」滋賀連続上映会と特別イベント～の企画に参画しました。2024 年度に開催です。

やさしい世界を想像する

“なんでも出来ないといけない”を超えて ―― 碧いびわ湖 常務理事・根本山恒平

碧いびわ湖は、2009 年の発足以来、“子どもと湖が笑ってる未来へ”を合言葉に、親子の仲間づくりから、さまざまな取り組みを行ってきました。当時生まれたばかりのわが子も今では中学3年生です。当時、長浜市小谷上山田で農家と大工が始めた米と家づくりを働きながら学ぶ“どっぽ村”というのがあり、熱心に取材して連載記事にしました。現在は当時のどっぽ生が農家（大戸洞舎）を継ぎ、今年からは「教育ファーム」を始めるといことです。県内のさまざまな地域で大人たちが力を合わせ、子どもの学びの場をつくろうというチャレンジが広がっています。

子どもの”学ぶ姿”に元気をもらう

私もこの15年間、わが子だけでなく、たくさんの親子と一緒に活動してきました。“学び”について、現場の実践を通して気づいたり、周囲の教育関係者に教えてもらったり、学習関連の専門書やネットメディアを読み漁ったりしてきました。わかったことは、人間の“学び”とは、学習者自身が周囲とのかかわりの中で動機づけられ、自ずと生じる現象だということです。

よく子どもが遊びの中で「良いこと思いついた」と言って何かをおもむろに始めることがありますよね。そんな姿に出会うと、一緒にいる私もすぐうれしくなります。

また、子どもは大人同士の話をよくよく聞いているようで、子どもとの何気ない会話の中で「え！」っと驚くようなことをちゃんと理解していて、話し聞かせてくれることがあります（大人同士の関係性とか）。

その人にとって大切な存在である他者に触発されて真似る（学ぶ）というのが人間にとっての学びの原体験だと思います。

なんでも出来ないといけないのか？

他方で子どもや親子との活動の現場にて、ちょっと戸惑うこともあります。

例えば、小学校の高学年くらいになると、なにか新しいこと、知らないことを問いかけられたときに、躊躇して周りにいる大人や友達の顔色をうかがうようなことがあります。まあ、大人でもそうかもしれません。これは、ごく当たり前の振る舞いとも言えるでしょうか。

また、集団の中で、一部のメンバーが他に対して「私は頑張っている」「なんでできないんだ」と言うようなことがあります。まあ、これも、そういう気持ちになる瞬間ってあるかもしれませんね。

それにしても、なんで私たちは「出来ないことを恐れたり」「なんでも出来ないといけない」と思ってしまうのでしょうか？

不登校やひきこもりが増える背景？

私（1976年生）は自分が小学5・6年生の時に不登校のクラスメートが一人いました。1・2年

のときは同じ学童クラブでその友達の家に遊びに行ったりしてました。3・4年は別のクラスでしたが、5年生になって、なんで学校に来ないのだろう？と不思議に思ったのを覚えています。当時は、担任の先生と友達たちと一緒に放課後にお宅まで出掛けて行ったこともありました。

ところで近年は、不登校が全国的にすごく増えているということが話題のため、あるラジオ番組に出演した社会学者が語っていたところによると、不登校はちょうどその頃（1980年代末）から見られるようになった社会現象で、その他、うつ病やひきこもり等の増加もあわせて生じてきたと言います。なぜ、そうした現象が増えるのでしょうか？その学者によると、古い村落共同体を離れ、郊外の団地に核家族で暮らす世帯が増え、バラバラになり、異質な他者との関わりが減ったことや、習い事や塾通いが増え、自由に外遊びする時間が少なくなったこと。また、自営業者が減り、サラリーマンが増える中で、子どもに「学校の勉強が満遍なく出来る」ということを求めるようになってきた、という社会の変化が背景にある、と言います。

子どもたちと大工小屋づくり

ところで、この5月の連休中に友人で仕事もよく一緒にさせてもらっている池田勝さんが栗東市浅柄野でされているスキニシー学校にて、子どもたちと建築士の森本浩嗣さん（碧いびわ湖・理事）と一緒に大工小屋づくりを始めるということで見学に行ってきました。

私は、子どもたちの将来につながる仕事体験と勝手に期待して行ってしまったのですが、実際に

は、池田さんたちはいつも通り、自然体で目の前の出来事を楽しみながら作業されていました。

私はついつい、子どもに対して「出来たらすごいよね」みたいな期待を一方的にしていますが、池田さんは、むしろなんと表現したら良いでしょうか。「やさしい世界」をつくろうとされているのかなと思いました。

能力主義は正義か？

ところで、私たちは、なんでこんなにも学校の勉強を含めて「出来たらすごいよね（出来ないといけない）」と思いがちなんでしょうか？

アメリカの有名なマイケル・サンデル教授（政治哲学）の著書『実力も運のうち——能力主義は正義か？』には、かつてアメリカン・ドリームが国民によって信じられていた時代から転じて、経済のグローバルゼーションや金融化の中で、行き過ぎた能力主義が蔓延し、極端に格差が広がり、米国内の地域社会が崩壊している様が描かれています。最後、サンデル教授は、個人個人で学力などにばらつきはあっても、地域の中で能力に応じて職業に就くことができ、コミュニティの中で助け合って共通善を実現できることの必要性を語られていました。

かえって日本でも、変化の激しい時代になにごとも柔軟に対応できる優れて高い能力の養成が教育には求められる云々が喧伝されていて、ついつい私もそんなストーリーをうのみしてしまいそうになり、気をつけたいと思いました。

地域社会における学びの場の先にある働く場、暮らしの場のあり方について、また周りの方々とも語り合っていきたいです。

お気軽にご参加ください

→ イベントに参加してみる

碧いびわ湖では、様々な体験やイベントを企画実施しています。Facebook や Instagram などでご告知や実施報告を掲載しています。まずは「いいね!」「フォロー」してください。

●Facebook→「碧いびわ湖」検索して” いいね!”

●Instagram→「碧いびわ湖」検索して” フォロー”



→ 入会する、活動する、寄付をする

碧いびわ湖には多彩な会員がいます。他の会員さんと交流したり協力したりすることで、より深い学びやつながりを得られます。会員は毎年5月に開催される会員総会にもご参加いただけます。

賛助会員や寄付での応援も大きな力になります。

・運営会員 1000 円/口・年（複数口可）議決権あり

・賛助会員 3000 円/口・年（複数口可）議決権なし

●入会→ホームページからご入会いただけます



→ 事業を利用してみる

共同購入や住まいづくりなどの事業のご利用で、身近な自然、生産者・職人さんたちとのつながりを育むことができます。会員でない方でもご利用いただけます。リサイクル活動にもご参加いただけます。

●共同購入サイト→「碧いびわ湖 共同購入」**検索**

●住まいづくり・リサイクル等→ホームページをご覧ください



▲碧いびわ湖の共同購入サイト

特定非営利活動法人 碧いびわ湖

電話 0748-46-4551 FAX 0748-46-4550

〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦3

メール info@aoibiwako.org

HP <https://www.aoibiwako.org/>

子どもと湖が笑ってる未来へ

碧いびわ湖